

Svayamprakāśatva をめぐって

石 飛 貞 典

I. 知らないし知性的原理が自ら輝くこと (self-luminosity, 自己照明) は、インドの知識論において広く認められたテーゼである¹⁾。これは仏教を初め、Pr [abhākara] 派や Vedānta 学派で承認されていた。Bhāṭṭa 派の綱要書 *Mānameyodaya* には、Pr 派と Ad [vaita] 派が、知を s [vayam] pr [akāśa] と見なしていることが説かれている²⁾。

Pr 派では、āt [man] と意の接触により jñāna が生じ、jñāna の結果として saṃvid が生じるとして両者を区別する (*Prakaraṇapañcikā*, BHU edn., p. 192)。saṃvid は「私はこれを把捉する」、「私はこれを想起する」と、mātr, meya, miti (=saṃvid) の三要素をもって現れる (p. 171, いわゆる triputisaṃvid)。mātr と meya は、認識の際それぞれ「私」ないし「これ」として知られ、miti は自ら輝く (p. 173, 333)。jñāna の結果たる saṃvid が s. pr. であるのは、認識の結果を自証 (svasaṃvitti) とする仏教説³⁾ を思わせるが、Pr 派の知識論への仏教の影響については、既に黒田泰司氏の指摘⁴⁾ がある。

II. Ad 派の Ś [āṅkara] は、知性の自己照明を svayamjyotis という語を用いて表す⁵⁾。これは *Bṛh. Up.* 4. 3. 9, 14 によるものと思われる。*Br. Sūt.* 1. 1. 24, 1. 3. 40 でもブラフマンは jyotis と表現されている。Ad 派では後代、自己照明を表す語として専ら s. pr. を用いるが、Ś 自身はそれを用いていない⁶⁾。pr [akāśa] という語は太陽や月の輝き、火の光輝などの意味で用いるのみである⁷⁾。中村元博士によれば、s. pr. の観念は仏教説の特色と見なされていた⁸⁾。Ś も、*Br. Sūt. Bh.* 2. 2. 28 で、Vijñānavādin からの問いの形で、vijñāna が、pr. を本質とし、自ら直接知られるという主張を伝えている⁹⁾。従って、Ad 派では Ś の頃には *Up.* の用語である svayamjyotis を用い、Ś 以後、恐らくは仏教の用語法を取り入れて、s. pr. と表現するようになったものであろう。

III. Ad 派では s. pr. を、存在すれば必ず光り輝くことと理解する。たとえば、*Vivaraṇaprameyasamgraha* では、āt の自己照明を次の推論で証明する。

ātmā sva-prakāśaḥ, sva-sattāyāṃ prakāśa-vyāptireka-rahitatvāt, pradīpavat saṃvedanavac ca /¹⁰⁾

又, *Pañcapādikāvivarāṇa* にも,

anubhavasya ca sva-sattāyām prakāśa-vyatirekādarśanāc ca /¹¹⁾

とある。なお, Ad 派では br, āt の本質を知とみなすため, br や āt も s. pr. とするが, 仏教と Pr 派では, 知らないし認識が s. pr. とするのみである点に違いが認められる。

Ad 派と同じく Vedānta 学派に属す Viśiṣṭādvaita 派でも, s. pr. は知, br, āt 等の精神的存在 (ajaḍa) の特質とされる。後代の *Nyāyapariśuddhi*, *Yatīndramataḍīpikā* 等では, s. pr. -tva と jaḍatva は等値とみなされている¹²⁾。これは, Y [āmuna] や R [āmānuja] も同様で, Y の場合, s. pr. は物質性 (jaḍatva) なる限定 (avaccheda) を欠くことを本質とするとし¹³⁾, R は s. pr. -tā を caitanya-sva-bhāvatā, cit-rūpatā と規定している¹⁴⁾。

IV. さて, Y は *Ā[tma] S[iddhi]* の中で, vitti は ajaḍa なるが故に, āt である, という Ad 派の主張を想定した上で, ajaḍatva とは何かを取り上げる。ここで avyabhicarita-prakāśa-sattāka と sva-sattā-prayuktatva の二つの定義の可能性を示すが, 前者は明らかに Ad 派の s. pr. に相当するものである。Y は, これらを否定する。即ち, 前者は快感 (sukha) の実例により不確定 (vyabhicāra) であり, 後者は燈火 (dīpa) の実例により不定 (anaikāntya) となる。ajaḍatva とは svasmai-prakāśamānatva を言うのであって, これは samvid には成立しない (pp. 110-111)。ここで「自らに対して」(svasmai) という表現が見られるが, これは *Yatīndramataḍīpikā* にも受け継がれている。そこでは, 同じく s. pr. ではあっても知と āt, br の間に違いを認める。知は他に対して (parasmai) 現れ, āt や br は自らに対して (svamai) 現れる, というのである¹⁵⁾。Y は *ĀS* の別の箇所でも, s. pr. を定義して, 次のように言う。

svayamprakāśatā tu sattayaivā'tmane prakāśamānatā (*ĀS*, p. 84)

又, ātma-vid の説として,

samvid iti svāśrayaṃ prati sattayaiva kasyacit prakāśana-śilo (*ĀS*, p. 70)

とも言う。ここでは ātmane, svāśrayaṃ prati と表現されている。āt を知の āśraya とする点は Pr 派に負うものであろう。Pr 派の tripūtisamvid の理論も取り入れている¹⁶⁾。現象界の実在性を否定する Ad 派の知識論を批判するに当たって, 実在論の立場に立つ Pr 派のそれを援用したものと思われる。

V. *ĀS* における Y の Ad 派批判の主たる対象は *I[śṭa] S[iddhi]* である。ここでは br, āt の s. pr. が次のように説かれる。

brahmaṇo'neka-rūpatvābhāvāt svayamprakāśatvāc ca (G. O. S. No. LXV, p. 72)

ātmano'stitva-svayamprakāśatva-nityatva-vibhutvādinām…… (p. 74)

IS では、二種の jñāna を説く。ajaḍa なる精神 (bodha) とその似現 (tad-ābhāsa) たる心の変容 (citta-vṛtti) である (p. 69)。このうち、vṛtti としての知は、物質的な内官の開展であるから物質的である。br, āt の本質としての知は s. pr. であり、唯一であって、不生不滅である。Y も引用する IS k. 1 (yānubhūtir ajāmeyānantāt-mānanda-vigrahā) の解説部分で Vimuktātman は、この anubhūti は svatassiddhi であるとする (IS, p. 1)。従って、この anubhūti は、先のブラフマンの本質としての知を意味することになる。続いて svatassiddha なるものに未生無等の成立しないことが説かれるが、IS-vivaraṇa によれば、これは Pr 派における、saṃvid は s. pr. でありながら発生等を有するという主張を否定するものであるという¹⁷⁾。

Y は IS の立場を批判して、saṃvid を次のごとく規定する。即ち、saṃvid は āt の dharma であって Ad 派の言うような universal なものではなく個別的であって、常住ではない (ĀS, p. 70-71)。又、対象も拠り所も無い saṃvid はないし、saṃvid, anubhūti, jñāna などの、連関を前提する語 (sambandhi-śabda) は、目的語や主語無しには用いられない (ĀS, p. 73) とする。ここにも Pr 派の tripūtisaṃvid 説の影響が認められる。

VI. Y は pr. に二つの定義を与える。① saṃvid-adūratvam (ĀS, p. 208) と、② jñānādūratva-prayukto vyavahāra-kṣamatā-lakṣaṇo (ĀS, p. 211) である。① は Nāthamuni の Nyāyatattva に基づくものであり、Y 自身の立場は②と思われる。Y によれば、pr. 自体は cit, acit の総てに共通である (ĀS, p. 84) が、āt の pr. は他と異なる。jaḍa の pr. は、異類 (vijātiya) たる光、感覚器官、saṃvid, āt に依存し、存在しても光り輝くとは限らない。saṃvid の場合、āt と同様 pr. を本質とする (cf. p. 120)、即ち存在すれば必ず光り輝くものであるが、āt という異類に依存する。āt の場合、異類は存在しないので、他に依存せずに輝く (ĀS, p. 160)。又 āt は svatantra なる jñātr であり、jñāna は jñātr たる āt の dharma である故、paratantra である。そこで、知の場合、その拠り所 (即ち āt) に対して光り輝く。従って、āt と saṃvid の pr. の違いは、知の pr. が āt との結合に依存するのに対して、āt は他に依存せずに輝くところにある (ĀS, p. 190)。

VII. 先に述べた如く、Y の認識論には Pr 派の影響が大きい、Y の āt があくまでも知性的原理であるのに対して、Pr 派の āt は jaḍa といってもよい¹⁸⁾ 点で大きく異なっている。又、Pr 派の āt は認識の際にしか光り輝かないが、Y の

それは常に aham と輝き、解脱した後も存続する主体である (ĀS, p. 100, 106)。この時、āt それ自身は働き (vṛtti) を持たず (ĀS, p. 183), その点では、精神的機能を全く持たない抽象された知そのものと āt をとらえる Ad 派¹⁹⁾ との共通性も認められる。Y の saṁvid は āt の dharma として、知性的原理 (cetana) であり jñātr たる āt と jaḍa の中間点にあり、それ自身は認識しないが、āt に対して様々な対象を照らし出す (artha-prakāśa)²⁰⁾。s. pr. の定義中に ātmane とあったのはこうした saṁvid の役割を反映しているのである。

- 1) Ad 派の s. pr. および s. pr. の觀念の歴史的展開については、Girdhari Lal Chaturvedi, *The Concept of Self-luminosity of Knowledge in Advaita Vedānta* (Adarsha Prakashan, Aligarh, 1982.) 参照。
- 2) *Mānameyodaya of Nārāyaṇa*, The Adyar Library Series 105, p. 253.
- 3) たとえば, *Pramāṇasamuccaya* 1. 10, *Pramānavārttika* 現量章 k. 320 以下。
- 4) 黒田泰司「Prakaraṇapañcikā 研究 (III)——Śalikanātha の認識論の一断面——」(『印仏研』31-1)。
- 5) *Brahmasūtrabhāṣya* 1. 3. 22, 3. 2. 4.
- 6) *Ātmabodha* k. 4 には svayaṁ prakāśate hy ātmā とあるが真作性は疑わしい。
- 7) *Brahmasūtrabhāṣya* 2. 3. 18; 46; 48, 3. 2. 15; 21; 28; 34 など。
- 8) 中村元『ヴェーダーンタ哲學の發展』(岩波書店) 479ページ, 注 (3)。なお, 中村博士は, Y が s. pr. を仏教に由来すると考えていたとされるが, Y は s. pr. な saṁvid を āt とみなす立場として仏教と Ad 派を挙げるのみで, 起源には言及していない。
- 9) *The Brahmasūtra Śāṅkara Bhāṣya* (Parimala Sanskrit Series No. 1, vol. II) p. 551. 金倉円照『ジャンカラの哲学』上 (春秋社, 昭和 55 年), 513~4ページ。
- 10) *Vivaraṇaprameyasamgrahaḥ*, Acyutagranthamala, p. 627.
- 11) *Pañchapādikāvivaraṇa of Prakāśātman*, Viz. S. S., No. 5, 1892, p. 51. その他の例として, *Vedāntasiddhāntamuktāvali of prakāśānanda* (Gokuldas Sanskrit Series No. 4, Chaukhambha Orientalia, 1975) p. 60 も挙げうる。
- 12) ajaḍatvam nāma svayaṁprakāśatvam (*Yatindramatadīpikā of Śrīnivāsādāsa*, Sri Ramakrishna Math, p. 79), asvayaṁ prakāśam jaḍam/ svayaṁ prakāśam ajaḍam/ (*Nyāyapariśuddhi*, Ch. S. S., No. 249, p. 6).
- 13) *Ātmasiddhi (Śrībhagavad-yāmunamuni-praṇītaṁ Siddhitrayam*, Bombay 1954), p. 85-6.
- 14) *Śrībhāṣya (Brahmasūtra-Srībhāṣya with Srutaprakāśika*, Ubhayavedānta-granthamala, 1967, vol. I), p. 149, 153.
- 15) *Yatindramatadīpikā*, p. 77, 102.
- 16) *Samvitsiddhi* (in *Siddhitrayam*, Bombay 1954), p. 332.
- 17) *Iṣṭasiddhivivaraṇa (Iṣṭasiddhi of Vimuktātman*, GOS, No. LXV, 1933), p. 440.
- 18) 丹治昭義「プラバーカラ派における自我論」(『印仏研』16-2) 666ページ。
- 19) 丹治昭義「ヴェーダーンタ学派における我の一考察」(関西大学『文学論集』20-3) 71ページ参照。
- 20) cf. P. N. Srinivasachari, *The Philosophy of Viśiṣṭādvaita*, The Adyar Library Series 39, p. 29. (駒沢大学北海道教養部非常勤講師)